

全国学校図書館研究大会（甲府大会）ご報告①

新聞活用と学校図書館『新聞を活用し意見を組み立てる』

- * 目的に応じて情報を取捨選択し、主体的に活用する態度・能力を情報活用能力という。
- * 情報を批判的に読解し、自らの考えを構築したり深めたりする創造的な能力を批判的思考力という。

学校図書館における新聞活用の観点として

教科書単元や教科書教材に関連させて、教科内容の理解を一層深めたり広げたりするための資料として積極的に活用することができる。

読書指導の一環として、国語科等の単元に合わせて、「並行読書」のための読書材の一つとして活用し、児童生徒の読書生活に資する。

- * 「並行読書」・・・新聞と併せて、他の図書を並行して読む。

新聞を活用してのワークショップ

- * チームには「名前」を付け、グループ学習の動機付けを図る。

（学習の手順）

- ① 新聞記事をよく読み、討議のテーマ（論点）を設定する。設定したテーマについてチームで討議する。
- ② チームで討議することを通して、問題について理解を深める。
- ③ 討議したことを整理し、チーム全員で協力して分かりやすく発表する。
- ④ 質疑応答する。
- ⑤ 設定したテーマ（論点）について討議と各チームの発表を踏まえて、意見を書く。
- ⑥ チーム内で意見を共有する。

（実践例）

新聞記事『うなぎ 行く末心配』

チームで設定したテーマ「君はウナギを食べる？食べない？」

チーム内で食べる派と食べない派に分かれて討議を行った。

食べる派としては、これまでの日本人とウナギの歴史を振り返ってみたり、ウナギ屋の気持ちを考えたりすると食べる方が良いという意見が出た。

食べない派としては、資源が回復するまでは待つ方が良い、将来自分の子孫にウナギのことを伝えるためには今は制限が必要であるという意見が出た。

その後、チームで協力して、全体で発表を行う。その後、他のチームより質疑応答を受けることを行った。

〔参考資料〕

教材として活用できる → 「道徳に新聞活用 NIE ガイドブック」
「新聞授業ワークブック」

全国学校図書館研究大会（甲府大会）ご報告②

『読者反応を重視した読書指導』 その1

1 読書へのアニマシオン

2週間ほど前に本を子供に渡しておき、読んでこさせる。その後、教室等の場で30名ほどの集団においてある読み方に特化したゲームを行い、その読み方を身に付けさせる。もともと読み方がゲームになっているというところがポイントである。

〈ゲーム例〉 いつ？どこで？ゲーム

時と場所に関するクイズ（質問）に答えるという形でゲームが行われる。子供の人数は、10～25人で、一人一人の子どもが異なるクイズのカードを持つ。（例えば、「エルマーが棒付きキャンディーをなめたのはいつ？」）

まずは、自分が持ったカードについて答えることになるが他の子どもたちのクイズにも耳をすませ、その本の時と場所の全体像をつかむようにするのである。

2 リテラチャー・サークル（小4～中3におすすめ!）

- ① 教師があるテーマに基づいて集めた本を子どもたちに紹介する。それぞれの本は3～5冊用意する。
- ② 紹介を聞いた子どもたちは、最も読みたい本を選ぶ。同じ本を選んだ人たち3～5人のグループを形成する。
- ③ グループごとに読む範囲や役割を決める。役割とは、優れた読み手が普段用いている読み方（ストラテジー）を表したもの。（※参照）同じ役割をする子どもが同じグループ内にいないようにすることで、発表の際に、一人一人が尊重される。
- ④ 自分の役割で、グループで決めた範囲を読む。
- ⑤ 役割で読んできたことをグループの他のメンバーに披露し、それについてコメントや質問をもらったり、それに答えたりする。
- ⑥ ③～⑤を繰り返し、1冊の本を読み切る。
- ⑦ グループでの話し合いを学級全体に報告する。



全国学校図書館研究大会（甲府大会）ご報告③

『読者反応を重視した読書指導』 その2

3 交流型読み聞かせ

交流のタイミングは、読み手が本を読み始める前、読んでいる最中、読んだ後と、様々な場面で行われる。題名に想起された先行知識を披露したり、題名を見て予想したことを述べさせたりする。

読み手は、考え聞かせの技術を用いる。考え聞かせとは、読みながら考えたことを聞かせるといふこと。つまり、読み手である教師は、題名や表紙や本文や絵などを含めて読んだり見たりして考えたことを口に出して言い、読者がどのようなことを考えながら本を読み進めていくかの見本を示す。

子どもは考えていることを皆に話すことを奨励される。読み手は、指導したいと考えている内容（指導内容）を明示しながら読み聞かせを行っていく。

例えば…

「視点」ということについて教えたいと思ったら、読み聞かせの前に「今日はこの本を読みながら視点を考えます。」と述べたり、途中に、「これはだれの視点で書かれているのかな。」と質問を差し込んだり、最後に、「この人の視点についてどう思ったかな」と話し合う時間を持ったりする。

『向き直って話そう』の時間がある。あらかじめ考えたことを言い合う「思考パートナー」を決めておき、教師の指示でパートナー同士がお互いに正面を見るように向き直って、二人で話し合う。

読み聞かせで聞いたことを自分達で様々な表現するリーダーズシアター（音読劇のようなもの）もできる。

大事なことは、これらの飛び交う言葉が「思考する言葉」であるということである。交流型読み聞かせをすることで、互いに考えていたことが明示的になったり、考えが深まったりするのである。

※リテラチャー・サークルの役割

どのグループにもおきたい役割	必要であれば加えたい役割
コネクター → 自分や現実とのつながりを見つける人	サマライザー → 要約をする人
クエスチョナー → 疑問を見つける人	リサーチャー → 作者・テーマなどを研究する人
リテラリー・ルミナリー → 優れた表現などに光を当てる人	ワード・ウィザード／ボキャブラリー・エンリッチャー → 特別な語を取り上げる人
イラストレーター → 浮かんだ情景を絵にする人	シーン・セッター／パッセージ・マスター → 場面・段落の特徴をとらえる人

全国学校図書館研究大会（甲府大会）より④

新聞活用と学校図書館

稲井 達也（日本女子体育大学）

本分科会は新聞活用を通して児童生徒に身につけさせる態度や能力、そのための方法についての講義とワークショップで展開した。

新聞を活用した学習を通して養う態度と能力として、① 目的に応じて情報を取捨選択し、主体的に活用する態度や能力の育成、② 情報を批判的に読解し、自らの考えを構築したり深めたりする創造的な能力の育成があげられた。

新聞を活用した教育内容の一つとして、新聞機能学習を新聞に学ぶととらえた。内容として新聞というメディアの特性、テレビ、ラジオ、インターネットとの違い、編集文法、紙面構成、記事の種類、見出し、リード文記事のスクラップ、などを学んでいくことである。

新聞利用(活用)学習を、新聞で学ぶととらえ、補助教材として提示したり調べ学習で活用したりする方法を話された。例えば、記事の読み比べ、記事の特性に応じた活用、コラムの書き写し、社説の要約などである。新聞づくりについては、新聞を学ぶということで学級新聞、学校新聞を作ることで学んでいくことがわかった。

学校図書館における新聞活用の観点として教科書単元や教科書教材に関連させて一層深めたり広げたりすることができること、読書指導の一環として読書生活に生かすことなどを話された。

活用のための方略として、どの単元や教材で新聞を活用することが効果的か考える。例えば環境問題、生命や人権、情報化社会である。

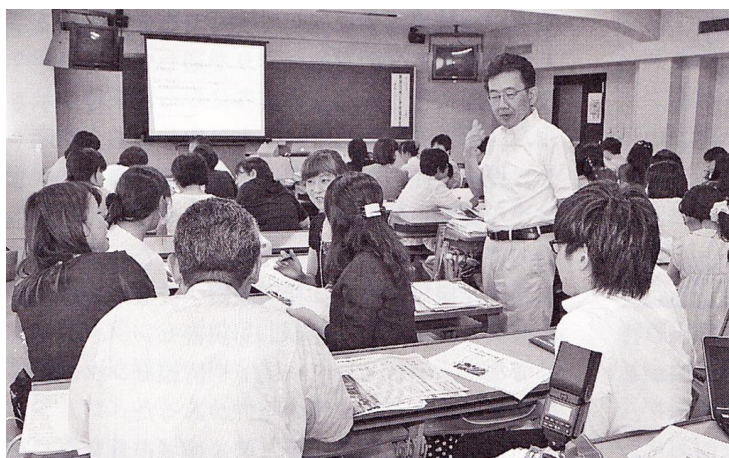
ワークショップではグループ学習を行った。

「ニホンウナギを食べるか」というテーマでグループ討議(四人)を行い、ワークシートに整理した。

「ニホンウナギがいなくなる」の記事を読み、日本の食文化にまで考えが広がった。

また、「大学生 1日あたり 読書0分4割超」「暇あればスマホ」の記事を読みグループで小見出しを考えた。

講義で新聞活用の理論を、ワークショップを通して授業で実践に生かせる具体的な方法を学ぶことができた。



(記録：山田万紀恵 埼玉県川越市立高階小学校司書教諭)